

< Super Expert Session 01-5 > 脳梗塞急性期診療における脳血管内治療と神経内科医の役割

九州大学神経内教室での新入局者における脳卒中診療の志向変化

松本 省二¹⁾²⁾

要旨：大学の神経内科教室の1例として，九州大学神経内科新入局者の中での脳卒中診療，脳血管内治療志向者の変化の分析（過去19年分）と人材教育プロセスを報告する。著者の所属する九州大学神経内科での過去19年119名の入局者中で脳血管障害を志向したものは14（12%）であった。その中で脳血管内治療の手技まで習得したいと希望した者は11人（9%）であった。しかし，昨年度（H25年度）の新入局者は7人中4人が，専門領域として脳血管障害を希望に挙げており，その4人全員が脳血管内治療の研修も希望している。近年目覚ましい脳血管内治療の進歩が，若い神経内科医の志向に影響をおよぼしている可能性がある。その気持をできるだけ維持し，脳卒中・脳血管内治療専門医として成長していけるようなシステムが全国の大学や脳卒中基幹病院に整備されていくことが必要と思われる。

（臨床神経 2014;54:1211-1213）

Key words：脳卒中，脳血管内治療，神経内科医

大学の神経内科教室の1例として，九州大学神経内科新入局者の中での脳卒中診療，脳血管内治療志向者の変化の分析（過去19年分）と人材教育プロセスを報告する。

マンパワー確保の観点で神経内科教室から大学神経内科教育変革への問題提起

大学神経内教室での新入局者における脳卒中診療の志向変化

H17年より，日本でt-PA（tissue-plasminogen activator：組織プラスミノゲン活性化因子）静注療法が認可され普及するにつれ，脳卒中急性期診療における神経内科医の役割が重要視されつつある。

著者の所属する九州大学神経内科での過去19年119名の入局者中で脳血管障害を志向したものは14（12%）であった（Fig. 1）。以前は神経内科入局者の中で脳卒中を志向するものは数年に一人程度であったがH23年からはコンスタントに脳卒中を志向の希望が出るようになった。さらに，脳血管内治療の手技まで習得したいと希望した者は11人（9%）であった（Fig. 2）。しかし，昨年度（H25年度）の新入局者は7人中4人が，専門領域として脳血管障害を希望に挙げており，その4人全員が脳血管内治療の研修も希望した。これは，脳卒中治療の中での脳血管内治療の進歩が，若い神経内科医の志向に影響をおよぼしている可能性がある。

日本では人口に高齢化にともない今後，脳卒中患者数は確実に増加していく。さらに，市民啓蒙や救急体制の整備が進めば，脳梗塞急性期のtPA治療や脳血管内治療適応者数も増加すると思われる。それに対応するために神経内科学の教育の中で脳血管障害の専門教育システムをさらに充実していく

必要がある。

現時点でも，脳血管内治療をおこなえる医師数が全国的に少なく，日本脳神経血管内治療学会の専門医制度では現在900名超が認定されているにとどまっている。その中でも内科を基礎診療領域とした専門医は50名あまり（5%強）とさらに少数である。日本では脳血管内治療は主に脳神経外科と神経放射線科により主導されてきた。しかし，脳血管障害というcommon diseaseに対して24時間体制で臨む治療システムを構築するためには多くのマンパワーが必要である。今後は脳神経外科や神経放射線科医のみならず，多くの神経内科医が積極的に参加していくことが必要と考える。

現時点で，九州大学神経内科所属の日本脳神経血管内治療学会の専門医は4名となった（Fig. 2）。全員九州大学神経内科で神経学の基礎を学んだ後，国立循環器病研究センターや小倉記念病院脳神経外科や湘南鎌倉病院脳卒中診療科などに所属させていただき脳血管内治療の専門教育をうけた。

前述の若手神経内科医の脳血管内治療までをふくめた脳血管障害への志向変化は大変喜ばしいことである。しかし，その気持をできるだけ維持し，脳卒中・脳血管内治療専門医として成長し，その力を脳卒中患者さんの治療に永続的に結び付けていくためには多くの課題が残されている。脳卒中および脳血管内治療に興味を持った若手の神経内科が，いまよりもっと気軽に，効果的にその後術を学べるようなシステムを全国の大学や脳卒中基幹病院の神経内科に整備していくことが必要と思われる。

※本論文に関連し，開示すべきCOI状態にある企業，組織，団体はいずれも有りません。

¹⁾ 小倉記念病院脳卒中センター脳神経外科〔〒802-8555 福岡県北九州市小倉北区浅野3-2-1〕

²⁾ 九州大学神経内科

（受付日：2014年5月23日）

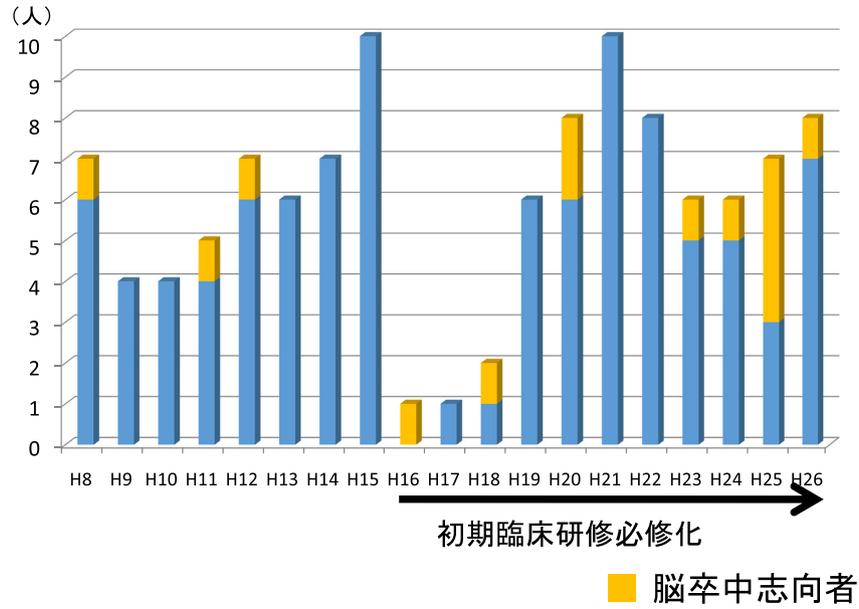


Fig. 1 過去 19 年間の九州大学神経内科新入局者における脳卒中志向変化 (n = 119 人). 以前は神経内科入局者の中で脳卒中を志向するものは数が H23 年からはコンスタントに脳卒中を志向の希望が出るようになった.

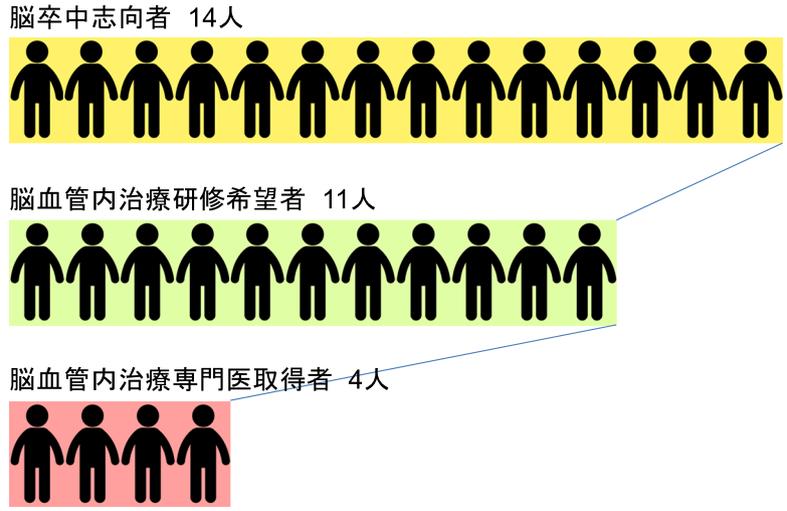


Fig. 2 脳卒中志向者の中での脳血管内治療研修状況. 脳血管内治療の手技まで習得したいと希望した者は 11 人 (9%) で、そのうちの 4 人はすでに日本脳神経血管内治療学会の専門医資格を取得した.

Abstract

Change in number of residents who plan to specialize in cerebrovascular disease and neurointervention in the Department of Neurology of Kyushu University Hospital

Shoji Matsumoto, M.D., Ph.D.^{1,2)}

¹⁾Department of Stroke center, Neurosurgery, Kokura Memorial Hospital

²⁾Department of Neurology, Kyushu University, School of Medicine

As an example of the Neurology Department of the University, I will report on the human resources education and changes in the number of young neurologists who want to specialize in cerebrovascular disease and neurointervention therapy in the Department of Neurology of Kyushu University. In our department, 12% (14/116) of residents planned to specialize in cerebrovascular diseases and 9% (11/116) of residents wanted to learn neurointerventional therapy. These rates are not high. However, in the past year, four out of seven residents want to specialize in cerebrovascular diseases and all want to learn neurointerventional therapy. It is possible that advances in neurointerventional therapy have influenced young neurologists. It is necessary to develop a system that encourages young neurologists to undertake these specializations in universities all over Japan.

(Clin Neurol 2014;54:1211-1213)

Key words: stroke, neurointerventional therapy, neurologist
